

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 25 日現在

機関番号：24302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370242

研究課題名(和文) 転換期における浮世草子作者と江戸・上方出版界の動向に関する研究

研究課題名(英文) The study of activities of Ukiyozoshi writer and publisher on Edo and Kamigata area at a turning point of Edo period.

研究代表者

藤原 英城 (FUJIWARA, Hideki)

京都府立大学・文学部・教授

研究者番号：20264749

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、西鶴と対抗した京都の書肆西村市郎右衛門(初代)の出版活動を整理し、さらに二代目市郎右衛門の享保期までの動向について、その概要を調査した。その結果、初代の没後、二代目市郎右衛門は青木鷺水編著の浮世草子『初音物語』(新出本)を刊行して、反八文字屋勢力の一角としての動きを示すことが明らかとなった。また、二代目市郎右衛門は江戸に出店を設け、西村の江戸進出におけるキーパーソンであったことが推測される。

研究成果の概要(英文)：This study is an investigation of publication activities of Nishimura Ichiroemon who is a publisher for generations: Especially Ichiroemon is famous as a publisher and writer competing against Saikaku. After Ichiroemon's death, Ichiroemon publishes Ukiyozoshi "Hatune Monogatari": It is an unknown work written by Aoki Rosui, that I discovered in this research. It shows a trend of his activity against Hachimonjiya who is a popular publisher in Kyoto. Ichiroemon opens a branch in Edo; He becomes a key person for making Nishimura's way into Edo market.

研究分野：日本近世文学

キーワード：西村市郎右衛門 浮世草子 西村本 八文字屋本 初音物語 青木鷺水 西村源六 本屋仲間

1. 研究開始当初の背景

京都の書肆西村市郎右衛門の初代は未達と号する俳諧師であり(元禄9年没、享年未詳)、自ら企画・執筆して二十数部の浮世草子類を出版した。それらは「西村本」と称され、「最初に西鶴を模倣した小説群として注目される」(「未達」中嶋隆執筆『日本文学大事典』明治書院、平10)が、当時においても「都に好色文の達人西村市郎右衛門筆を振ふて西鶴を消す」(『元禄大平記』元禄15年)との評判が見られ、特にその好色本においては西鶴を凌駕する評価がなされていた。

しかし、そうした西村本の評価は、「西鶴の作品に刺激せられて、逸早く好色本を自作出版し、好色本流行のブームに便乗」したものであり、「西鶴に対抗する「好色本の達人」として」の評は「いささか過当の言というより外はない」(日本古典文学大系91『浮世草子集』昭41、野間光辰解説)とされ、また文学史的評価としても

西村が『好色三代男』(貞享三刊)と題名まで『好色一代男』(天和二刊)、『好色二代男』(貞享元刊)を追う作を出したのは西鶴への敗北宣言に等しく、以後春本まがいの好色本に転じ、浮世草子界は西鶴の独り舞台となる。(「八文字屋本」長谷川強執筆『増訂版日本文学全史4近世』學燈社、平6)

と記されるような否定的評価が一般的に定着していると言える。

『西村本小説全集 上・下』(勉誠社、昭60)が刊行され、また中嶋隆(『初期浮世草子の展開』若草書房、平8)・湯澤賢之助(『西村本の浮世草子』新典社、平12)両氏によって西村本の研究は整備されつつある。特に中嶋は西村本の相板元として登場する江戸の西村半兵衛との関係に着目し、西村本の造本意識や好色本に関する研究に着手した。しかし、半兵衛の刊行書が途絶える「元禄九年以降は市郎右衛門の江戸売捌元がどうなっ

いたかは不明であると言えない」(上記中嶋書)とされるように、その研究は初代市郎右衛門および半兵衛の出版活動に焦点が絞られたものであった。二代目市郎右衛門の出版動向、特に江戸での活動や浮世草子作者・上方書肆との関係性などについての研究はいまだ手付かずと言ってよいのが現状である。

2. 研究の目的

京都の書肆西村市郎右衛門は西村本と称される浮世草子群を刊行して西鶴に対抗するが、西鶴が元禄6年に没するとともに西村本は変容し、市郎右衛門もまもなく没する。文学史としては初代市郎右衛門の活動のみが言及されるが、二代目市郎右衛門は西鶴没後の浮世草子の転換期において注目に値する出版活動および経営戦略を発揮する。すなわち、当時覇権を握りつつあった八文字屋に対抗する動きを反八文字屋勢力と連携して示すとともに、江戸に自ら進出して『官刻六諭衍義』(享保6)の刊行等の幕府の御用に与り、また西村源六を出店として江戸本屋仲間の結成に強く関与したことが窺える。本研究は、今日まで言及されることのないような二代目市郎右衛門の活動を主として、その他の上方書肆の動向とともに明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

これまで藤原が行ってきた八文字屋とそれを取り巻く当時の書肆や浮世草子作者の研究に、新たに二代目西村市郎右衛門の出版活動と浮世草子作者青木鷺水の作品分析を加え、西鶴没後の浮世草子界を中心とする京・大坂・江戸三都の出版界の動向を総合的に明らかにしようとするものである。具体的方法としては、文献資料の調査・分析に基づく実証的研究を旨として、(1)初代西村市郎右衛門没後の元禄9年以降、江戸本屋仲間から南組が独立する享保12年を含む享保年間

までを一応の区切りとして、二代目市郎右衛門および江戸店西村源六の刊行書の伝本・書誌調査を行い、(2) 関連資料の収集、(3) 上記の調査・収集に基づく翻刻・解題等の研究成果の公開を行う。

4. 研究成果

本研究期間において、その研究成果として次に挙げる学会研究発表と2点の研究論文を公刊した。

(1) 日本近世文学会秋季大会(2014年11月24日 於日本大学)

「二代目西村市郎右衛門と西村源六 - その動向と江戸戦略をめぐって - 」

(2) 「鷺水の newly 浮世草子『初音物語』(巻一・四) - 翻刻と解題 - 」(『京都府立大学学術報告・人文』67号 2015年12月)

(3) 「二代目西村市郎右衛門の出版活動 - その登場から享保年間までの動向 - 」(『京都府立大学学術報告・人文』68号 2016年12月)

(1) は初代西村市郎右衛門の出版活動を整理し、二代目市郎右衛門が自ら江戸に進出するとともに源六店をも出店として構え、積極的に江戸市場への参入を行ったことを発表した。当該発表は科研費による本研究課題の見通しを示すものであり、(2)(3)の論文はその研究成果の一部でもある。

(2) はこれまで知られていなかった青木鷺水編著、西村市郎右衛門等刊の浮世草子『初音物語』(鷺水序、宝永四年八月、江戸万屋清兵衛・京西村市郎右衛門刊)を翻刻し、解題を付したものである。本論文において、『初音物語』は西村本とされる『浅草拾遺物語』(貞享三年正月刊、洛下旅館序)の改題改鼠本と称すべき作品ながら、序文を初め新たに追補された本文(巻一の一)もあり、新補部分の作者も含む本書全体の編著者として青木鷺水が想定できることや作品の構

成・内容、また宝永四年に当該作品が西村から出版されることになった浮世草子界の状況について分析した。

浮世草子作者としての鷺水を考える際、デビュー以来の版元菱屋治兵衛との決別の書として『古今堪忍記』(宝永五年正月、江戸出雲寺四郎兵衛・京菱屋治兵衛刊)を認め、菱屋に替わって西村から刊行された『新玉櫛笥』(宝永六年八月、京中川茂兵衛・西村市郎右衛門刊)を区切りとして、前後に二分する見解が示されていた。しかし、『初音物語』の発見によって『古今堪忍記』刊行以前に鷺水と西村との交渉が確認できることになり、鷺水と菱屋・西村をめぐり版元の交代劇に新たな視点がもたらされた。

(3) は二代目市郎右衛門の出版活動について、その登場時期から享保年間までを調査し、考察を加えたものである。二代目に関しては、初代没(元禄九年)後に江戸で正徳から享保半頃まで活動が確認できる同名の西村市郎右衛門が二代目を継いで帰京したとの説がある一方で、それを同名の新たな江戸売り捌き元であるとし、同時期に登場する京の西村九左衛門なる書肆を二代目と推定する説もある。

本稿で調査した結果、江戸の市郎右衛門と京の九左衛門は同一人物と見られ、九左衛門は二代目市郎右衛門として正徳五年から享保十五年頃まで江戸に拠点を移して活動していたことが明らかとなった。二代目は江戸市場を重視し、上記の期間自ら江戸に進出するとともに、享保四年には出店(西村源六)をも開業させる。源六は享保六年に江戸本屋仲間の結成を奉行に願い出るが、その背後に二代目市郎右衛門の江戸戦略が想定されることとなる。

以上の研究成果により、これまで知られることのなかった二代目西村市郎右衛門の出

版活動の輪郭が浮き彫りとなったと言えよう。初代市郎右衛門は西鶴に対抗して浮世草子の「西村本」を刊行したが、二代目の手掛けた『初音物語』は初代「西村本」路線の強化・リニューアル化、換言すれば新生「西村本」の嚆矢となる作品であり、八文字屋八左衛門と菊屋七郎兵衛が覇権を争っていた宝永期の浮世草子界において、菊屋陣営と連携する反八文字屋勢力の一角としてそこに参入したことを推測させる。

また二代目市郎右衛門の進出が江戸の本屋業界に及ぼした影響は、江戸本屋仲間結成のキーパーソンとなる出店源六の活動とも相俟って、日本近世文学史のみならず出版文化史においても看過できないものであることが明らかとなった。今後の研究の進展により、文運東漸現象の要因またはその前史として二代目の活動が関与してくる可能性が展望されよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

藤原英城、二代目西村市郎右衛門の出版活動 - その登場から享保年間までの動向 - 、『京都府立大学学術報告・人文』68号、査読なし、2016年、pp39-53

<http://id.nii.ac.jp/1122/00006056>

藤原英城、鷺水の新出浮世草子『初音物語』(巻一・四) - 翻刻と解題 - 、『京都府立大学学術報告・人文』67号、査読なし、2015年、pp1-18

<http://id.nii.ac.jp/1122/00000089>

〔学会発表〕(計1件)

藤原英城、二代目西村市郎右衛門と西村源六 - その動向と江戸戦略をめぐって - 、日本近世文学会(秋季大会) 2014年11月24日、日本大学文理学部(東京都世田谷区)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤原 英城 (FUJIWARA, Hideki)

京都府立大学・文学部・教授

研究者番号：20264749

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()